

佐賀県研究成果情報（作成 2019年3月）

[情報名] 秋輪ギク品種「佐賀 RK 1号」の腋芽形成率は高温条件下で著しく低下する

[要約] 秋輪ギク品種「佐賀 RK 1号」を昼温 35℃で生育させると、夜温（20～25℃）に関係なく、腋芽形成率が著しく低下する

[キーワード] 佐賀 RK 1号、温度、腋芽

[担当] 佐賀県農業試験研究センター・野菜花き部・花き研究担当

[連絡先] 0952-45-2143・nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 花き

[専門] 栽培

[背景・ねらい]

キクは佐賀県における主要な花きである。近年はキクの用途拡大に伴い、仏花以外の需要も高まっており、当センターでは、これまでに多様な用途への利用が期待できる桃色の秋輪ギク品種「佐賀 RK 1号」を育成した。しかしながら、高温期に親株を栽培する場合には腋芽が消失し、採穂性が低下する課題がある。そこで、生育温度が腋芽形成に及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容]

1. 昼温 35℃で生育させると、夜温（20～25℃）に関係なく、腋芽形成率が著しく低下する（図1、表1、図2、表2）。
2. 昼温 30℃以下で、夜温が 25℃以下では、腋芽形成率の著しい低下はみられない（図1、表1、図2、表2）。
3. 昼温 35℃では、親株の採穂に影響する下位節位でも腋芽形成率が著しく低下する（図1、図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本試験は、人工気象器（BIOTRON、NK System 社製）を用いて行った結果である。
2. 温度処理開始以降に展開した節位のうち、下部5節程度は処理前の温度が影響する。

[具体的なデータ]

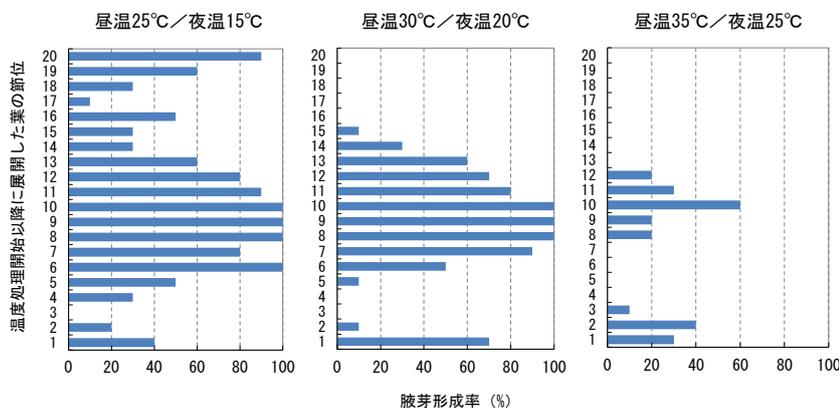


図1 「佐賀 RK 1号」の温度処理開始以降の各節位における腋芽発生率（2016年）

表1 「佐賀RK1号」の温度処理開始から6節以降の節位における腋芽形成率（2016年）

処理区 ^{注1)} (昼温/夜温)	日平均気温	腋芽形成率 (%)			
		6~10節	11~15節	16~20節	6~20節合計
25℃/15℃	20.0℃	96.0 a ^{注2)}	58.0 a	48.0 a	67.3 a
30℃/20℃	25.0℃	88.0 a	50.0 a	0 b	46.0 a
35℃/25℃	30.0℃	20.0 b	10.0 b	0 b	10.0 b

注1) 昼温7:00~19:00、夜温19:00~翌5:00、その間の時間は温度上昇および下降時間

注2) Tukey-Kramer法の多重比較検定を行い、異なる英小文字間に5%水準で有意差あり

【耕種概要】挿し芽：2016年5月20日、定植：6月7日、温度管理：定植までは成り行き、定植以降は処理区のとおり
 照明：20,000lx（昼間：7:00~17:00、花芽分化抑制のための暗期中断：23:00~2:00）、
 栽植様式：4号プラスチック鉢に1本定植

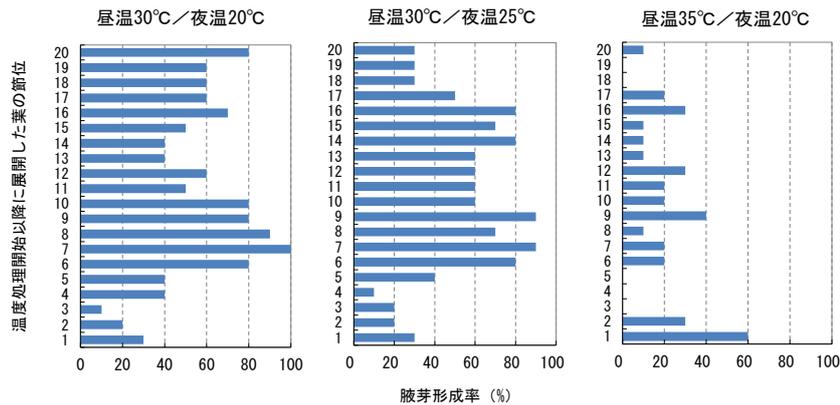


図2 「佐賀RK1号」の温度処理開始以降の各節位における腋芽発生率（2017年）

表2 「佐賀RK1号」の温度処理開始以降に伸長した6節以降の節位における腋芽形成率（2017年）

処理区 ^{注1)} (昼温/夜温)	日平均気温	腋芽形成率 (%)			
		6~10節	11~15節	16~20節	6~20節合計
30℃/20℃	25.0℃	86.0 a ^{注2)}	48.0 ab	86.0 a	66.6 a
30℃/25℃	27.5℃	78.0 a	66.0 ac	44.0 a	62.7 a
35℃/20℃	27.5℃	22.0 b	16.0 b	12.0 b	16.7 b

注1) 昼温7:00~19:00、夜温19:00~翌5:00、その間の時間は温度上昇および下降時間

注2) Tukey-Kramer法の多重比較検定を行い、異なる英小文字間に5%水準で有意差あり

【耕種概要】挿し芽：2017年6月13日、定植：7月6日、温度管理：定植までは昼温25℃/夜温15℃で管理、定植以降は処理区のとおり、
 照明：20,000lx（昼間：7:00~17:00、花芽分化抑制のための暗期中断：23:00~2:00）、栽植様式：4号黒ポリポットに1本定植

[その他]

研究課題名：多様なニーズに対応した佐賀オリジナルのキク新品種開発

予算区分：県単

研究期間：2016~2017年度

研究担当者：坂本健一郎、松村司、松本茜、高取由佳、月足公男

発表論文：